

翻字『奥州征伐記』(四)

藤 沢 毅

A Reformation of "Oshū-Seibatsuki" (4)

Takeishi Fujisawa

前号に引き続き、『奥州征伐記』を翻字していく。この作品の成立問題などについては、拙稿『絵本平泉実記』の典拠(『文教科国文学』38・39合併号 平成10・2発行)に少しく触れてある。

底本略書誌

架蔵本。文政十年写。大本十卷十冊。

縹色表紙。左辺題簽、墨書で「奥州征伐記」。

見返し、序、総目録、なし。扉題「奥州征伐記」。

凡例

- ・私に句読点、濁点、「」、『』を補い、また段落を設置した。
- ・本文中には平仮名、片仮名ともに使用されているが、特別意図的に強調されている箇所を除き、平仮名に統一した。
- ・今、氏などは、それぞれ「より」「とも」「あるいは」「ども」と直した。
- ・一文字の繰返しは、平仮名の場合「」、片仮名の場合「」、漢字の場合「々」にした。複数文字の繰返しは、三文字以上

翻字『奥州征伐記』(四)

でも「く」に統一した。

- ・漢字は基本的に、現在通行されている字体に統一した。
- ・明らかな誤写もそのままの形で出し、右に(ママ)と付注をした。
- ・いわゆる「見せ消ち」の状況は採用せず、修正後の形のみを記した。
- ・明らかに脱文がある場合は、その箇所に(脱文あり)と記した。

奥州征伐記 (見返し貼付け丁表)

十本之内 武清 (見返し)

奥州征伐記 卷之第四 目録

- 一 鎌倉勢勝利 初度の夜討 城兵敗北の事
并 高衡後度の夜討に利を得る事
- 一 宇田行方破る、高衡奇計勝軍の事
高衡安津加志に帰る事
并 城兵百戦百勝を得る事
- 一 高衡大勇猛 勅使河原有直を生捕り、助て返す事 (1才)
- 一 高衡奇計 寄手敗軍の事
并 高衡再び謀て鎌倉勢を悩ます事
- 一 高衡謀略 敵を遠く退る事
并 錦戸太郎最期 和田畠山争論の事

奥州征伐記 卷之第四 (1ウ)

高衡安津加志にかへる事

并 城兵百戦百勝の事

斯て羽州根津ヶ関をば、故佐藤庄司が舍弟・湯尾庄司が一族、堅めける所に、北陸道より比企藤四郎義員大将として押寄ける。然るに高衡此節思慮して兵を一人鎌倉殿の雜式に仕立、先日軍に討取りたる敵の中に義盛が与へたる木札を腰に付たる者数十人有しを取り納め置けるを、彼の者の腰に付させ、鎌倉殿の御使に偽り、比企義員方へ遣し、云はせけるは、

「大手安津加志（2才）の城攻ると雖、城門堅くして落ざる故、一旦謀ことを以、和睦する上は合戦すべからず。勿論、此段行方へも夫れより申送るべし」

と云はせけり。義員は是を笑と心得、軍を止めて宇田、行方へも告送るに仍て、急に攻る事勿りける。个様の事にて心ならず隙取て、九月三日に安津加志に帰りける。高衡居ざる間、城兵は力を落して落城近きに有べしと思へ居ける所に、高衡帰りければ城中に大に勇み喜びけり。此日梶原平三景時は御前へ参じて申けるは、

「爰に不思議成る事の候。只今迄、是非に落べき城を持（2ウ）こたふのみならず、今日城の体を見るに、昨日よりは抜群に整々として、城兵銳氣を張たるは、是いか成る事ぞや。景時更に心得ず」と申ければ、御前に居合せたる人々も興を覚しけり。

私に曰、城中に高衡居らざる故、諸軍勢氣を屈し、尽十（「従」の意か？）軍せず。去れば旗印も人氣に連て兵威衰へる時は爽ならず。

今此節、高衡城中へ帰り来りし故、諸人勇氣凛々と兵威盛んに成る故を、自ら旗印杯も一段と爽也。又、寄手多き中、斯の如く（3才）成る事を心付く梶原も凡人にはあらず。

然る所に、高衡、櫓の上に立頭はれ、大音に申けるは、
「此間、暫時諸用の事有て平泉へ罷越し、見参に入らず候。明日一戦の節、見参して眠りを覚し申べし」

と呼はりける。寄手、是を聞き、「扱は高衡帰り来る」と驚き騒ぎ、斯て九月四日辰の刻より軍始りて、敵身方、入乱れて戦ひけり。此節、二品仰せけるは、

「秦衡兄弟多しと雖、高衡は無双の者也。渠が為に軍兵余多死亡しける事安からず。然れば今日に限て外々の者共には目を懸ず、いかにもして（3ウ）高衡を討取るべし。若、討得たらん者は奥州攻第一の高名也」と相触れける故、弓矢取る程の者は「只々高衡を討とらん」と心懸ける。

扱も城兵は三万余人にて、其大将は黒糸威しの甲冑を着し、黒の馬に打乗り、高衡が陣頭に進んで相働く故、鎌倉方は段々戦ひられて人馬共に尽しからず。其故は第一奥州勢は馬武者多く、歩武者共は長熊手にて敵の馬の足を懸て引倒す。鎌倉方には騎馬武者少く、多くは歩武者にて、一人戦ひ勞れし所に（4才）大勇猛の高衡、身命を惜しまず、四角八面に当て、人なき所を往来する如く、仍て鎌倉勢は弥々つかれて難義しける所に、義盛は味方を下知して後陣の勢を引替んとすれども、城兵共厳しく戦ふ故、そなへを操り替へる事能はず。仍て射手三十人を揃へ、段々に射させける故、此時には城兵も進み兼て猶予しけるに仍て、義盛は手早く畠山を引取らせて、三浦義澄、左原義連、小山田重成等が軍兵を入替て、稠しく軍しける故、城兵も一旦勝利（4ウ）したれば、軽く城中へ引入よと見る所に、又新手四千余人、一同に鯨波を上て駈出で、堅横に切廻る。鎌倉勢も勇氣を勵し戦ひける故、勝敗分たず。日既に夕陽に及ぶ故、双方相引にしけり。

爰に山内次藤三郎、滝口経俊は、悪源太十六騎の者一人須藤刑部丞滝口俊連が子にて、御先祖頼義朝臣八幡殿より為義、義朝等に奉仕して、数代の御家人也。殊に経俊は勝れたる勇士、尤鎌倉殿秘蔵の士也しが、今日の軍に騎馬武者十三騎を射落して、残る箭一本有りしが、「此矢を以、何卒（5才）高衡を射落すべし」と思へけるが、城兵の長熊手にや馬足を懸られ進み難き故、軍奉行熊谷小次郎直家に向て、

「今日敵兵十三騎を射落し、籬に残る矢一本有り。願くは、高衡を射落し度思へ共、敵に馬足を悩まされて進み難し。哀れ、御馬一匹恩借申たし」

と云ければ、小治郎聞て、即時に馬より飛下り、

「疾々乗り玉へ」

と云ければ、経俊云は、

「足下の御志し、過分に候へ共、足下馬なくして何と仕給ふ」

小次郎曰、

「勇士戦場に於、馬を望奉れ乍、与へざるは本意に非ず。御辞退（5ウ）なく乗り給へ。我等は只今敵の馬を取り申べし」

と云捨、敵中へ走せ入けるが、大兵の武士、太く逞き、河原毛の馬に乗たるを引落さんとしける所に、彼の者の郎等二人助来りて、後より直家が足を取て引倒しければ、敵兵馬より飛下りて、既首をとらんと仕ける時、直家が敵の腕首しつかと取て働らかせず、然る所に平山武者所季重逸参に馳せ来り、彼の二人の郎等を引掴んで、弓杖一丈計り左右へ投捨、又彼の者の首を討取り、小治郎を引起して、

「足下は軍奉行の身として、自身の働き無用也」

と制し（6オ）ければ、直家聞て、

「滝口経俊が敵将高衡を射落さんと馬を所望しければ、則、馬を与へし故、乗替を取るべき為、斯の如し」

と答へければ、季重感じて、

「夫れ、乗られよ」

と敵の馬に小治郎を乗せける所に、敵方より射懸る矢飛来て季重が馬に中りし故、馬は忽倒れける。季重早速飛下り、敵中へ駈入て彼矢を射たる敵を取らへて首を討、其馬に飛乗て駈出ければ、数万の敵兵此形勢を見て、

「扱々冷ましき働き、凡人の業には非ず」

と恐怖しけり。

偕又滝口三郎経俊は、熊谷直家（6ウ）が敵の馬を取らんとて敵中へ蒐入けるが、却て取り込められ難義に及ぶと聞ければ、「今の恩を報ずべし」と逸参に駈来り向ふを見れば、直家大に忿り、

「高衡を射ん迎、馬を乞へしにあらずや。我を助よとて与へし馬には非ず。然るに敵を射る事忘却して、私の恩を報ぜんと思ふは甚だ不忠也」

と以の外呵責しける故、経俊聞て「尤」と思へ、「今は高衡を射ずんば小治郎が思ふ所、面目なし」迎、方々を馳せ廻り見れ共、高衡を見ず。

却て敵の射る矢に右の腕をした、かに射られて血の流る、事泉の（7オ）如し。経俊は少しも屈せず其矢を抜捨、猶も敵中を馳廻る所に、高衡下知して働くを見て、経俊大に喜び、弓矢取直し打番ひしが、右の腕を射られる故、強く引事叶はずして放しける故、其矢、高衡が頭の上をかすりて遥の後に落たりける。

「経俊大事の前に疵を蒙り、唯一筋の矢を射損じたる事、高衡が武運未だ尽ず、経俊は又、冥加に叶はざる所也。今は存命何かせん。殊に熊谷に對して面目なし。よししく、此上は討死すべし」

と覚悟して郎等と呼んで「此旨舍弟経好に語り聞せよ」迎（7ウ）郎等を返して其身只一人敵中へ駈入ける。

爰に大井治郎実春は、此由を聞き、

「我は渠と断琴の交り深し。然るに経俊一人は討たせじ。我も俱に戦死すべし」

と云て敵中へ蒐入ける。此由、又、直家聞て、

「我、経俊に敵を射よと云へしが、討死せよとは誰人が云べしや。私党の面々、経俊を助よ」

と下知しければ、小野六郎、諸賀兵衛、以下「心得たり」と敵へ駈向ふ。

此輩は鎌倉方にて一人当千の勇士也。此節、城兵も我討取らんと命を限りに戦ひけり。

爰に一品房正寛、常陸房正明とて鎌倉殿に二人の法師（8才）武者有て、大勇剛の法師也。此節薙刀を打振り高衡が郎等本朝三六と戦ひけるが、終に一品房に討たれける。常陸房も稠しく戦ふ故、さしもの奥州勢も此二人に追立られける故、遠矢に討んとするを高衡制して、「可惜者共也。助け置べし」と制しける。実にや武勇の法師也と、敵も味方も感じけり。

高衡勇猛 勅使河原有直を生捕り、助け返す事

同年九月十日、安津加志国見峠雷鳴夥しく響きて、所々方々へ落ける。二品の御陣営にも落て、下部の陣小屋を打潰すに（8ウ）仍て、二品大に驚き給へ、御家人を召て吉凶を「いかに」と問はしめ玉ふに、各々一同に「好事も無きにはしかちと雖、況や雷鳴り落て陣小屋破れ損ずるは是凶事ならん」と言上しける故、二品も専ら御慎み有るに依り、諸卒も俱に恐れけり。

同月七（十一）日辰の刻、高衡二万余人出し戦はしむる。然るに鎌倉勢、昨日雷鳴して落けるを皆々心中に怪み思ふに仍て、尽數軍もせざりけり。此故に城兵勝誇り、高衡又自身八千余人を引率して鷺地暗に打て出、鯨波を上て押懸る故、鎌倉勢右往左往に駈ちらされける故、和田義（9才）盛此体を見て二品の御前に参じて軍談する事、良久し。其後諸軍に下知し給ふは、

「頼朝に力を合せんと九州の輩、早、近国に馳せ来るに依て、海道筋諸軍勢にて指塞ぐ由、又四国の軍兵共も兵船數百艘を浮べて海上を漕来る由、然るに八州の諸勢十万余人の大軍を以、此一城を攻落兼、徒に數日を送る事、渠等が思ふ所も面目なし。仍て九州四国の輩が着陣せざる内、此城を攻落し度思ふ也。諸軍勢忠義を励し軍すべし。功有る輩には当座の恩賞沙汰すべき也」

是（9ウ）偏に士卒の心を励すが為也。義盛密に鎌倉殿へ申進め奉る所也。去れば人心に怨を思はざるはなし。当座に恩賞有べしとの触れな

れば、諸軍各々高名すべしと勇み進んで軍しける故、乱れたる備を立直しければ、城兵却て引色に也ければ、高衡城中へ使を以、「味方難義に及ぶ間、早く加勢を出さるべし」と申送るに仍て、国衡三万余人を引率して出張りしける。只一つの門を開て打出ける故、兵士込み合ふて延引しける故、高衡は由利八郎を呼て申けるは、

「国衡諸勢の出し様こそ拙し。足下早く（10才）城中へ降り下知して門々を開くべし」

と下知しければ、由利八郎は急ぎ城中へ立帰て、三方の門を開きければ、諸勢一度に出る事を得たり。

此三万余人、最初打出たる二万余人、一手に合せて五万余人、鎌倉勢十万余人、敵身方十五万余人喚き叫ぶ声は天地を震動するが如し。挑み戦ひけるが、双方相引にして息突乍、腰兵糧の用意なき故、先手を後陣へくり返して兵糧を遣はせんとする故、混乱する図を見て、城兵共、俄に起立、無体に押懸る故、鎌倉勢既敗せんと（10ウ）するを義盛急度見て、三浦一家の軍士を以、稠く戦ひければ、城兵共は腰兵糧を遣ひ、呑湯せずして精をもみける故、此時には以の外に難義して猶予するを見て義盛は益々稠く捲り立ければ、さしもの城兵も今は早怵へ兼て引退く。

爰に海野小太郎幸氏は城将国衡を見付、惣ひ濟して放つ矢、錦戸が草摺に立ければ、国衡大に恐れ、士卒に構はず一当に城中に逃入に仍て、城兵も散々に乱れて我先にと引入ける。此故に高衡大に怒り、国衡に向て、

「仮令（11才）其志しは悪しく共、合戦に於は励み申されてこそ、せめての事なるに、軍に取り詰たる以前は兄弟に不義を行ひ給へ、戰場に臨んでは人より先に敗走し、其上淫乱大酒を好み、心底不直にして軍には弱く、一つとして取得なき人にて有」

と恥しめけるに、弟乍も猛威に恐れて一言の返答にも及ばず。

然るに今日も、はや申の刻に及びけれ共、城外に篝火多焼き続けた

れば、「扱は夜討するや」と身方にも篝火を焚かせける所に、大手の門を開て一万余人二手に（11ウ）別れて、一手の大将には樋爪五郎高衡、又一方の大将には由利八郎惟平、兩人也。

爰に工藤左衛門尉祐経は未だ目に立程の軍をせざれば、今宵は是非に高名すべしと思へ、河村太郎秀方の弟・千鶴丸を伴て一陣に進みけるが、高衡兵を勵して無体に押懸る。由利八郎惟平と十度合て十度別れ、互に必死を極めて豎横に駈立ければ、鎌倉勢は立足もなく追ちらされける故、工藤左衛門は大に恐怖して、

「此手の軍急也。早く引取て後軍に譲るべし」と云。千鶴丸聞て、（12オ）

「凡戰場に臨んで、譬へ敵強しとて引返さんは臆病の至り也。我等此所を一足も引まじ」と云へば、祐経笑て、

「白昼に組打するは、生捕杯して、武名を顕はさんは宜しからめ。夜中敵に向て射殺されるは大死也。早く退くべし」と云。然れ共、千鶴丸は曾て聞入れず、

「合戦に昼夜の差別なし。」（と）、弓矢を取て散々に射る。祐経も、千鶴丸は十三歳にて若輩なれ共、拔群の勇なれば、大に感称す。祐経は音曲遊芸に於ては第一の功の者なれ共、戰場にては手足惑ひと見へ（12ウ）たり。

此節、高衡は由利に向て、
「時分はよし。疾々兵を引取るべし」と云。八郎聞て、

「敵若し付入りにするならば難義成るべし」と云。高衡聞て、

「我も左は思へども、足下、先、城へ入て軍勢をくり入れ申されよ。国衡今日の軍甚だ拙し。足下如き者、城中に一人なくては叶ふまじ。後殿

りは高衡すべし。早々引入れよ」

と云に仍て、由利八郎は則、城中へ引入けり。

爰に小山五助宗政は、高衡には従弟にて、殊に秀衡入道存命の時、奥州の様子を伺ひ知らん為、一年余り奥州に在り（13オ）ければ、互によく見知りけり。然るに宗政は今宵真先に進みけるが、高衡を見付て一矢射けるに、其矢樋爪が鎧の袖に立たり。高衡、則、是を取て見るに「小山五助宗政」と書付たれば、此矢を射返さんと思へ、弓に番へけるに、不足なれば引裂紙にて我矢と彼宗政が矢を括付て射けるに、宗政が頬に射付ける。宗政馬より真逆に落たり。舎弟結城七郎朝光、大に驚き駈寄て肩に懸、引退く。

爰に勅使河原権三郎有直は高衡に組まんと馳せ寄る所を、（13ウ）高衡は左の手にて権三郎の鎧の上帯取て引寄せ、小脇に搔込ける故、少しも働く事叶はず。高衡夫より片手雜りに切廻る内に、戦ひ烈しき故、高衡は勅使河原を投捨、挑み戦ふ。此節城兵駈来て、終に有直を生捕りけり。「是はいか成る者にや」と尋けり。城兵聞て、

「樋爪殿先程小脇に搔込乍、軍し玉へしが、投捨給ふ。仍て我等生捕りたり」と云。

「高衡曾て忘れしや」

斯尋ける。いか様、樋爪五郎は奥羽兩州に無双の大力量勇猛の士也。扱も高衡は勅使河原（14オ）が戒めを解免して、

「足下既、我に組んとするを捕へて脇に挟み乍働きたれば忘れたり。其時覚へ居たらんには、争か今まで助置べし。其当座下切りにすべきに、覚へざるこそ、足下命冥加と云べし。然るを今更誅したり共、何程の事か有べし。疾々帰られよ」と却て鞍置馬与へて返しける。

扱又、鎌倉殿は勅使河原が生捕れし事を不便思召ける所に、権三郎御陣へ帰り来りけるを、二品見玉へ「如何にや」と御尋に仍て、則右の次第を言上しければ、二品聞し召、高衡が(14ウ)情有事を感じ玉へ、其以後、高衡生捕られしを「助命有べし」と仰出されしが、高衡辞して誅せられける。

斯如くなれば、安津加志は数年攻るとも中々落間敷所に、高衡出羽の国へ加勢に往たる道にて、安津加志の城落城しけり。去れば高衡は平泉にて泰衡に申けるは、

「某羽州へ出陣するならば、安津加志は危かるべし。国衡が働きにて防戦弱かるべし。仍て泰衡御自身安津加志へ御越し有て働きて防戦し給へ。諸軍を励、下知し給へかし」(15オ)

と申に仍て泰衡「尤」と同心して平泉より安津加志へ出張す。惣軍の着到は彼是十五万也しが、彼城を攻落されしは是非もなし。然れば高衡は、十五万にも増りたる勇士とは知られける。

高衡奇計 寄手敗軍の事

并 高衡再び謀て鎌倉勢を悩す事

斯て搦手口、出羽の国、根津ヶ関は湯尾庄司一党にて相守る。寄手は比企藤四郎義員、千葉三郎師経、案内者は越後の住人城四郎永茂、佐竹義兼等の兩人(15ウ)也。

爰に相州箱根の别当弟子仙光房阿闍梨行慶と云僧有。是は賀加美次郎長清が弟にて、元とは弓馬の家に生れ、其上柁尾の明恵上人の弟子と成て、八宗顕学の名僧にして専ら諸書に通達して、呉子孫子が秘する事迄も博く学びたれば、義員に此僧を添て軍議を司らしめ玉ふ。去れば、根津ヶ関の落城は此僧の大功也。斯て大将湯尾庄司を討取り、鎌倉勢は勇み進んで奥州の石名坂迄乱入す。

此節、樋爪五郎高衡は一万余人を引率して、経ヶ岡の城に着陣す。鎌倉勢と間を(16オ)隔ること、僅、坂東道二十里也。此節搦手を守り居

たりし川部太郎高重は討死す。仍て伊賀羅高経計り、高衡が陣へ至て申けるは、

「敵陣に仙光房行慶と云へる軍学師有て謀ことを廻らし、合戦する時は彼の法師甲冑を着し、手車に乗り、軍中に有て士卒を下知す。然るに渠が計略に依て搦手を破られ、庄司討たれたり。此後は能々御思慮有べし」と云。高衡聞て、

「其法師何程軍略を廻らす共、恐るゝに足らず。我又謀略して渠が智を折くべし」

と云、石名坂へ人を遣はし、根津が関を(16ウ)破らるゝ事、其聞へ有るに仍て、泰衡が命を更て、樋爪五郎高衡経が関迄着陣す。然るに、

「此所は究竟の地形也と雖、是にて御勢を待たん事遠ければ、某其地へ進んで一軍仕るべし」

と申送る故、鎌倉方にも心得たる旨返答しけるが、行慶聞て、

「敵方より申越す赴きを察するに、経が関は地利悪しき故也。然れば今宵此方より押寄せて敵を一捲りに追ちらして仕もふべし。是則敵の謀ことにて仍て身方計略を廻らすと云、孫呉が旨とする所也」

と申ければ、比企藤四郎已下是を聞き(17オ)「尤然るべし」とて既夜軍の用意しける。扱又、高衡は士卒に向て曰、

「汝等、此所を経が岡と名付し事、何故と思ふや。昔伝教太師諸国を廻り玉へしが、此所は東国の果也とて、書写せし法花経、此所に埋め、又肥前の国、六浦の郷は西国の果也とて、法華経を埋めしより、以来彼の所を九州の経が関と云い、当所を陸奥の経が関と云。尤要害の地也。然れ共、『敵の寄せ来たるを待たんより、其方へこそ押詰めべし』と申送りたれば、外々の輩は聊心付くまじ。彼法師学才有れば、『扱は経が関は(17ウ)地利あしき故、味方を計らん為に斯く申越したり。然ば、此方より押詰ん』とて今宵必押来るべし。其用意して相待べし」

と下知して、一万余人三手に分け、又、雑兵千五百余人には鐘太鼓を持

たせて、

「敵近付くとも鯨波をせず、只々鐘太鼓を打鳴らすべし」

と下知して、経が岡の要害に残し置、歩武者二千余人に弓矢を持たせ、是より右の方、喰瀬と云所に伏置、前には柵を結せたり。其身六千五百

余人を引率して、経が岡の左り、阿武隈川の末へ、笹川の堤（18才）を押来る敵と引違へ、石名坂の方へ押出し、鎌倉勢の後ろへ廻り、然るに寄手は四万余人揉みにもんで押来ると雖、高衡が兵は音もせず、堤の下を廻る故、曾て知る者なし。又、鎌倉勢は押詰ると等しく、岡の声を揚けれ共、城中には鐘太鼓を打鳴らすのみにて岡の声を合せず。依て、不思議に思ふ所に、思へも寄らず後の方より大山の崩る、計りにて鯨波を揚て押懸る故、「すはや後に敵有り」と周章狼狽て混雑しける所を、高衡が軍兵共は所々（18ウ）に走り廻て、野山の枯草に火を放しければ、折節山風吹ける故、八面に燃上りて、偏に白昼の如く也。然るに、鎌倉勢は後に敵兵有る上に、四方二面に燃へ上る。敵は厳しく追立る故、「コハいかにせん」と騒動しける所に、城中の千五百余人は貝鐘太鼓を打鳴らし、喚き叫んで駈出たり。此時は既、前後より取り巻かれるが、漸く右の方へ退かんとするが、喰瀬に隠し置たる二千余人は筋尻をそろへて射懸る故、此前にも敵有りとて引返して左りの方へ走りけるが、此方には大河有て逆浪（19才）立に、此間の大雨に水増りて底知れず。斯て四方八面に包まれければ、殊に夜中也。水色も見得ず、打入て、渡る事も叶はず、いかん共すべき様なし時、比企義員云は、

「此川左のみ大河と云にもあらず。去れば関東の利根川、上方の宇治瀬田杯も渡したり。又、藤戸の海だに渡したる様しも有り。義員瀬踏をすべし。面々続け」

と真先に乗り出し、河水へぎつと乗入りたり。然るに此川水深しと雖、左右なく向へ渡り越へたり。諸軍勢を見て「我も〜」と騎馬武者残らず越へけるが、（19ウ）哀れ成哉、歩卒の頭見得ず、押流て溺れ死す者

数知れず。扱こそ狼狽へ廻て討たる、者多かりし。

既、高衡方へ生取り三百余人有り。さしもの仙光房も漸く川渡で、危急を通れたれ共、此軍に脆負しける故、諸軍勢も大に疎み、此已後は仙光房が計略を用へざりし也。

斯て鎌倉勢は漸々川を渡ると雖、武具兵器悉く失ひ、又傷れける故、軍する事も叶はず、石名坂へ引返しけり。然るに高衡は逃行敵を追討せず、生取り三百余人を城中へ引入れけるが、（20才）是皆雑人なれば、皆々戒めを解きゆるし、

「汝等は皆主命に随ひ戦場の供せし者なれば、高衡が仇にも非ず。又、汝等が為に主人とする面々も鎌倉殿に従ひ、当国へ向ふ所なれば、是又仇にはあらず。只々望む所は、鎌倉殿の首級一つ也。然る上は誅したり共、負べき軍に勝と云も非ず。勿論、汝等古郷に妻子等も持居るべし。疾々帰り去るべし」

と云て、素肌の者には夫れ〜に武の具を与へて返しける。此故に三百余の者共、合掌して大に悦び、石名坂（20ウ）に戻りければ、義員是を見て、

「此上三百人の輩、助命して返す事、子細有べし。此方よりも是に付て計略有べし」

迎、彼三百人の中に高衡が武の具を与へし者十八人を撰み出して、委細に謀ことを申含めて敵方へ問者に入れり。仍て十八人の者共、高衡が陣に行至て申けるは、

「今日命を助り、主人の方へ戻りしが、武の具を給はりし故、主人疑ひ、暇給はりたれば、今更何方へも行べき所なく、難義に及び、哀れ、御陣中に差置かれなば、御奉公申べし」

と云。高衡（21才）聞て、
「汝等が心底感ずると雖、高衡は大将軍にあらず。泰衡へ訴へなくては私に御沙汰仕難し。但し、汝等一つの功を立べし。其上は計らふべし」

と云。十八人の者共、

「いか様の仰せにても背き申まじ」

と云。高衡聞て、

「誠に嬉しく思ふ也。然る上は汝等間者と成て、敵陣を伺ひ、我に内通すべきや」

と云。渠等聞て、

「最安き事也」

と答へければ、高衡則、十人をば留置、八人をば石名坂へ遣はして敵陣の様子を伺はせけるに、追付走せ戻りければ(21ウ)高衡問ふて曰、

「我軍の仕様は如何沙汰するや」

と尋ければ、八人一同に、

「誠に奇妙の計策也、と取り沙汰仕る」

と答ふ。又問、

「敵陣に仙光房と云者有り。此法師が噂は如何に」

渠等答て、

「渠は加賀美次郎長清が弟にて、元來武門の身なれ共、当時僧形にして、軍勢を司る故、諸卒是を疎んで今程は渠が計策を用ひず」

と云。高衡又、

「敵兵重て当城へ向はざるや。其沙汰はいかん」

と云。彼者聞て、

「一両日中には押寄すべし、と其用意専ら也」

と云。爰に於、高衡は(22オ)留置たる十人の者共を呼出して、

「敵兵必定寄せ来たるや、否や、見定て来るべし」

と下知して、八人は人質として留置、十人を敵陣へ遣しけり。此者共高衡に鎌倉勢の事を告る様に持成し、其実は高衡が事を委しく石名坂へ内通しけり。然る所に大手安津加志破れて、鎌倉勢平泉へ押詰る故、軍難

義に及ぶに依て、高衡を呼返すの飛脚来れりと、高衡が陣中騒動しける

を義員が間者共「扱は」と思へ、此由を石名坂へ知らせければ、鎌倉勢は大に喜び、「スハヤ、(22ウ)敵、経が岡を引取るぞや。追討にすべし」と我劣らじと駈出く押付けるに、敵兵何つの間にか落失けん、経ヶ岡を引取り、一人もなければ、「骨折せずして敵城を取たり」と悦び、暫く休息して、「片時も早く平泉へ乱入して、二品の御感に預るべき也」と、夫より進んで押行所に、道七筋有て、「敵兵何れの道より退きしや。所詮兵を分て追討すべし」と各々七筋の道へ引別れて、追蒐る。

此道七筋有と雖、末は只一筋也。泰衡方は、此落合の湊と云は異なる大川有て、向ふには要害を構て泰(23オ)衡方より常陸治郎、同三郎、同四郎兄弟三人に二万余人を指添て、守らせけるに、櫓を引て守る故、堅固也。仍て鎌倉勢渡るべき様もなく、彼是する内に兵糧乏しく成て、大に難義仕けると也。

高衡謀略 敵を遠く退る事

并 錦戸太郎最期 和田畠山争論の事

去程に寄手の諸勢は腰兵糧を付ざる故、飢疲て軍用に立べき体にあらずれば、「一先石名坂へ引取り、兵糧を遣ひ、重て向ふべし」とて引返しけり。然るに、高衡は元來(23ウ)偽て退き、敵軍石名坂より打出たる道へ廻て、貯へ置たる兵糧米三千石悉く焼払へ、閑道を経て迹をも見せず。

扱も鎌倉勢は石名坂へ引取りけるが、糧米皆悉く焼尽され、すべき様なく、荊田杯して暫く飢を凌ぎけるが、永々の軍にて足らざる故、一旦此所を退き兵糧の用意すべしと、羽州を陣払して、越後境迄引取て、糧米の至るを相待ける故、徒に数日を送りけり。仍て平泉は遅参しけり。是偏に高衡が計策に仍て、三百人を助命し、是を謀ことの種として、敵の謀略に乗せられ(24オ)たる様に見せ、却て謀ことを構へ、敵を遠く追下し、一軍をもせずして、勝事を得たり。実や高衡は古今の英雄也とぞ恐れける。

斯て高衡は落合の湊に至り、常陸治郎兄弟に向て、
「鎌倉勢此所へ来たらずや」

と問ふ。治郎聞て、

「川向へまで来りしが、川を渡らず引返したり」

と答へければ、高衡完爾と笑ひ、

「心安かるべし。十日廿日の内に敵軍此所へ来るまじ。某遠く追払ふたり。然る上は早く安津加志へ急ぐべし」

迎、馳せけるが、先づ／＼平泉へ赴きけり。

実や高衡が云し如く、搦手の寄手（24ウ）は越後の国より糧米至らざる故、心ならず数日を送て、平泉へ至ること甚だ延引しけり。

斯て鎮守府將軍泰衡は、多勢を引率して安津加志の城へ移る。此所へ楯籠る諸勢、都合十五万余人なれば、仮令泰衡軍慮の才拙しと雖、既、兩州の兩將也。然れば諸卒の心を勵し合戦する程ならば、仮令敵を追払はず共、落城に及ぶ間敷に、泰衡一戦にも及ばず平泉に引取る故、終に安津加志は落城しけり。扱も泰衡熟く／＼思慮しけるは、

『搦手根津が（25オ）関へは高衡向へたれば子細なし。又、当城には国衡大軍にて籠りたれば容易に落城すべからず。只々心元なきは行方なれば、我は平泉へ帰城して本城を守るべし』

とて、国衡を招き、

「足下、此城を堅固に守るべきや」と云。錦戸聞て、

「鎌倉勢、当城を責る事、既五十余日。未だ落城せず。是偏に国衡が力に非ずや。必ず氣遣ひ有るべからず」

と答へければ、泰衡大に悦び、

「然らば我は平泉へ帰て、搦手の左右を聞、又、本城を守るべし」とて、平泉へ帰りけり。是に（25ウ）仍て諸軍勢各々勇氣たるみて、十五日の軍には城兵散々に戦ひ負て城中へ引入けるを、鎌倉勢所々に火を

懸けける故、猛火盛んに燃上るを見て、城兵弥々氣を失ひ、悉く皆落失たり。

爰に和田義盛は柴田郡大鷹明神の鳥居の前に備を立、落人を打留んと思ふ所に、城將錦戸太郎は大関山を志して手勢を先に立、落行所に、和田義盛是を見て、「スハヤ、国衡遁さじ」と追蒐乍射けるに、国衡が乗たる馬の鞅に射付たり。（26オ）仍て馬は則時に倒れ死す。国衡は歩立に成て落行を、義盛又二の矢を番へ射けるに、錦戸が射向の三枚目より肩を射抜けり。此故に国衡は弥々恐れて逃行、向ふを見るに、畠山は郎等を引具して走せ来る故、国衡は進退究り途を失ふ所に、重忠が郎等飯富源太引組けるに、国衡は手負たれば、何の手もなく押伏せられ首を掻れけり。重忠下知して渠が直垂の袖に首を包み、同太刀鎧を分とりして御前へ馳参じて、敵將国衡が首を畠山重忠が手へ打取たる由、言上（26ウ）しければ、二品大に悦び玉へ、

「未だ敵將の首を見る所に、重忠此首を得る事、奥州攻第一の軍忠也」と御感浅からざる所へ、和田義盛馳参じて申けるは、

「国衡を討たるは重忠の功名にあらず。義盛が射落せし所也」と言上しければ、

「甚だ胡乱也。全く重忠が手へ討取る首を持参す。但し貴辺の方に証拠有るや」と云。義盛聞て、

「首持参の事は格別。某が射たる矢、渠の鎧の草摺三枚目の頭に立たり。鎧は緋威しにて、黒の馬に乗たる」

と云に仍て、国衡が鎧を取りよせ、梶（27オ）原景季是を吟味しけるに、緋威し也。又、草摺を取て矢の迹を見るに、射向の草摺三枚目の頭に鑿を打たる如き矢の迹、後へ抜て有り。義盛申処相違なく、是重忠の矢に非ず。いかにも和田が矢の迹也。然れ共、二品未だ何共仰せの旨なければ、義盛居丈高に成て声を勵し、

「假令、此恩賞は重忠に給はる共、聊も苦しからず。申事は遠慮なく申さるべし。今日義盛大鷹宮の辺に於、国衡に行逢て射たる矢、最初渠が馬に中り、二の矢は只今言上(27ウ)せし如く」と申に仍て、則彼所へ人を走せて糾明有りしに、是又和田が申如く也。仍て二品の仰せに、

「義盛高名比類なし。然れ共、重忠に於は其性正直にして偽り飾る者にあらず。是を以、其身の誉れとすれば、他人の手柄を盗むべき氣質に非ず。是偏に郎従前に在て、国衡が首を取るに、義盛が為に手負し事を知らず。我手へ討得たりと思ふ成るべし。然れば必ず争論すべからず」と仰せければ、重忠畏りて、

「正義有る上には是非を申所なし。今日又、某(28オ)矢を放したる事なれば、義盛が高名に紛れなし」と云。爰に於、奥州責第一の功は和田義盛に相究りけり。惣じて鎌倉へ討取る首数一万八千余級。其内、重忠が手へ二千四百余級。是、今日の第一也。又、義盛が手へは、遙劣て九百余級也。然れ共、国衡が首を得たれば、勝れたる高名也。

扱も樋爪五郎は搦手根津ヶ岡の寄手を只一戦に二十里の外へ追退け、「安津加志の城心元なし」とて、歩卒は迹に残して僅八十余騎を引率し、夜を日に繼て道を急ぎけるが、(28ウ)十五日の夜九つ時、大鷹の宮の辺迄至りしが、安津加志、既、落城して国衡討たれたるを聞、又、城の燃上るを見て、勇猛の高衡なれ共、勇氣折けて大に軻、果扱、又、泰衡が音信を尋ければ、合戦の前方平泉へ引取りたりと云。此時には高衡涙を流して、

「兄弟相並て三十余万の大軍有乍、敵追ちらず力もなく、結句城を攻落さる、事、是全く父入道殿の遺命に背きし故、天より我国を亡し給ふ也」と云て、馬より下りて忙然と座し居たり。

理り成哉、危かりし(29オ)宇田行方の敵を遠く追退け、又安津加志

に立帰りて大手の敵に目を驚かせ、根津が関に至り、只一戦に敵を追払へ、寢食を忘れ、勇み進んで帰り来る所に、大手斯の如く攻破られ一面に燃上るを見るならば、假令修羅帝釈也共、力を落さずと云事や有べし。殊に召具したるは纔八十余騎也しが、又心を取直し、前乱れたる兵士を集めんと篝りを焼けるに、諸々方々へ落失たる兵、駈来り。高衡を見て大に喜びける。高衡先達、大関山より使を平泉へ遣はして、

「根津(29ウ)ヶ関の寄手は二十里の外へ退けたれば心安し。但し安津加志心元なく存る故、直に彼所へ馳参る也」と申送りければ、泰衡聞て、

「扱は安津加志の落城を高衡が知らずと覚ゆ。然るに彼所に至りなば、乱軍の中に討たるべし。汝等早く押出して高衡を助けよ」と軍兵を出しける故、是又大鷹宮へ馳来る故、此所にて、先敵陣の様子を聞合せけるに、鎌倉殿は安津加志より舟留りへ御陣を移されたりと云

故、

「扱は程近し。未だ夜は明まじ。急に押寄せよ」と三万余(30オ)人の兵を三千人宛十備に分け、一手は和田義盛が陣に向ひ、一手は江間義時に向ふ。一手は土屋義清に向へ、一手岡崎悪四郎に向へ、一手は上総介高弘に向ひ、一手は土肥次郎に向ひ、一手は吉見治郎に向ひ、一手は梶原景時に向ひ、一手は主計介行政に向ひ、一手は本陣を襲ふ。

然るに鎌倉勢は今日安津加志を攻破り、敵を平泉へ追入り、心安く思ひ前後も知らず臥したる所へ、高衡押寄せければ、寝耳へ水の入如く、大に狼狽騒動して、土屋兵工尉義清如き無双の(30ウ)勇士も敗北す。仍て鎌倉殿も既、危ふく見へ給ふを、信濃守遠光、三浦義澄、同義村等守護して、逃げ給ふ。然るに高衡は偽て、

「鎌倉殿を樋爪五郎討取たり」と呼はりければ、

理り成哉、危かりし(29オ)宇田行方の敵を遠く追退け、又安津加志

「扱は大将討たれさせ給ふぞや」

と周章狼狽する事斜ならず、我先にと逃行を追詰く、討取る首数一万四千余級也。此時にはさしもの和田畠山も怵兼て備を乱し、安津加志に留り得ずして、白川迄行程二十四里の所を引取りけり。

斯て高衡は敵の捨たる武器兵器を拾ひ集めて（31オ）平泉へ引取りけるに、大鷹宮の深田の中に錦の直垂着たる、首なき死骸有るを能々見れば錦戸国衡なれば、高衡泪を流して、

「悪人なれ共現在の兄也。国の乱れに仍て浩る有姿也。此儘に捨置事にあらず」

とて、彼死骸を引とらせ、

「馬を土中へ埋むべし」

と申ければ、郎等共、

「馬の死骸は捨置べし」

と云。高衡聞て、

「主の討死に供したる馬也。生る時は愛し、死したる逆捨置かば、本意にあらず」

とて其辺の土中へ埋めさせけり。

斯て鎌倉殿は白川の関迄（31ウ）逃玉へ共、武器兵器は云に及ばず、糧米等迄亡失しける故、是を調へ給ふ間に、敵平泉の要害堅固に補理して守る故、中々急に落城すべしとも見得ざりけり。

扱又高衡は平泉へ歸りて、兄国衡が死骸を葬りける。時に文治四年九月十五日、前の鎮守府將軍兼陸奥守秀衡法師龜腹の嫡男、錦戸太郎国衡生年卅八歳也。

奥州征伐記卷之第四終（32オ）

—平成十二年九月二十九日 受理—